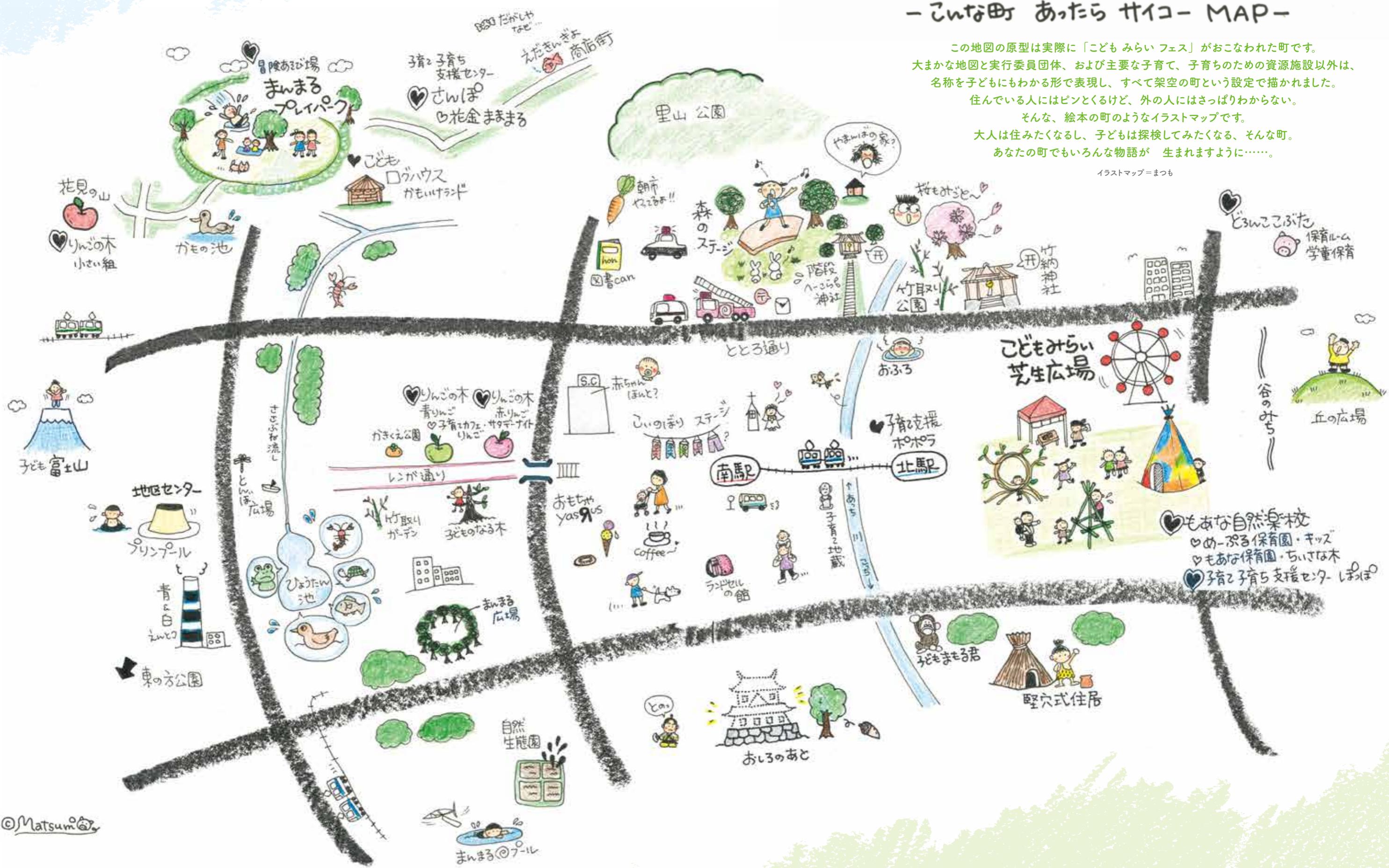


子ども まらいのまち

- ひむか町 あつたら サイコー MAP -

この地図の原型は実際に「こどもみらいフェス」がおこなわれた町です。
大まかな地図と実行委員団体、および主要な子育て、子育ちのための資源施設以外は、
名称を子どもにもわかる形で表現し、すべて架空の町という設定で描かれました。
住んでいる人にはピンとくるけど、外の人にはさっぱりわからない。
そんな、絵本の町のようなイラストマップです。
大人は住みたくなるし、子どもは探検してみたくなる、そんな町。
あなたの町でもいろんな物語が生まれますように……。



自分の責任で、自由にあそぶ 出張プレイパークが出現！

～地域の竹を使って、のぼろう、あそぼう、つくろう～



竹のジャングルジムやかざぐるまは、地域のつながりや人のつながりを象徴するフェスの重要なモチーフとなりました。プレイパークのリーダーをはじめ、子どもたちのあそびと育ち、そして、地域の自然を長年にわたり見守ってきた人たちにお話を聞いてきました。

文／ながたに睦子／森ノオトライター



う中学生たちも、もきちのそばで、学校であつたことを報告したり、冗談を言って笑い合つたり。この子たちもこのプレイパークでたくさん遊んで大きくなつていったのでしよう。プレイリーダーと子どもたちとの間に流れる空気は、まるで仲の良い兄弟ようで心が和みました。

出張プレイパークという試み

しばらくするとまんまるプレイパーク世話人代表の西田さんがやってきて、お話を聞くことができました。



鶴池公園内、ケヤキの木を中心とした広場に「まんまるプレイパーク」はある。自分の責任で、自由に遊べる、子どもたちの解放区。そこでプレイリーダーを務める「まさみっちょ」

まんまるプレイパークの挑戦



ビルに囲まれたセンター北広場をプレイパークのように子どもたちが自由に遊べる場にすることなんてできるのだろうかと、みんなで非常に悩みました。まずは、子どもたちが、行ってみたくないとはじまりません。なにか目を引くもの、シンボルタワーとして都筑区の竹を使ったティピをつくることに決定しました。続いて まんまるプレイパークで子どもたちに人気の竹の遊具は、どうだろう？遊び慣れていない子には危険じゃないか、という不安もありましたが、高さを低めに設定、都会のビルの中に竹のタワーがあることが冒険でした。

初めて来た場所で遊びだすきっかけとして何かがつくれるコーナーがあるといい。そういうのは、どこのイベントでもありがちなのだけれど。ここでは、プレイパークで子どもたちがワクワクする「道具を使う」「職人の技に触れる」「自分のやりたいことができる」ことを大切にしました。

そして、「竹切りコーナー」「竹の風車作りコーナー」「竹箸作りコーナー」をそれぞれテントの中で開催。

プレイパークが ほかの公園にない魅力のひとつは、火が使えることなのですが、さすがに焚き火は難しいので21日の夏至の夜に、切った竹の筒をホルダーにしてキャンドルを灯することで火を体験。

当日は、竹の遊具にたくさんの子どもたちと、その周りには、見守る大人たち。その姿を見て愛子さんが、「この街は、まだまだ大丈夫……」だと思ったそうです。竹の風車づくりには、2日あわせて300名が参加。竹箸づくりには、150名が参加、また竹切りには、100名の参加がありました。

その場に合わせて来た子どもたちと共に遊びをつくりだすのがプレイリーダーです。東京・横浜・鎌倉から15名のリーダーが遊びにきて、大きなしゃぼん玉、楽器演奏、鬼ごっこ、落書き、ダンボール積み、竹並べ、竹崩し、そのほか名も無い遊びがあちらこちらでうまれています。初日の夕暮れどき 自転車を押してやつてきたやつこの布芝居。翌日は、ティピの中で三宅さんと大橋さんの紙芝居。ほのぼのとしたなつかしい時間がながれていきました。

(まんまるプレイパーク 西田清美)

会場で、ひときわ目をひき、子どもたちが夢中になって遊んでいた竹のタワーとカラフルなティピ。センター北駅前の芝生広場にとつぜん現れたこのタワーとティピが、今回のフェスの象徴でもありました。竹のタワーは、ジャングルジムのようでもあり、おおぜいの子どもたちが、くつをぬぎさて、われ先にと登って遊んでいた姿がとても印象的でした。また、広場の向こう正面に立てられたティピと呼ばれる三角テントは、子どもたちの格好の隠れ家であり、遊び場となっていました。そのほかにも、竹でつくれたシーソーや、竹でハシやかざぐるまをつくったり、そのほかにも、ベーゴマやけん玉、紙芝居など、懐かしい遊びもあって、子どもたちは、とても楽しそうに芝生広場を駆け回っていました。

そんな子どもたちの遊びを提案し、遊具をつくり、あたたかく見守っていたのが、地域のプレイパークのスタッフたちでした。プレイパークというのは、子どもたちが自分の責任で自由に遊べる空間のことで、お仕着せの遊具と禁止事項ばかりがある公園とは少し違います。木登りや泥遊び、焚き火や刃物を使った工作などなど、子どもたちがワクワクするような外遊びができます。そして、そこには、子どもといっしょに、自由な遊びと安全を見守るプレイリーダーと呼ばれる存在がいます。

よく見ると、のこぎりやナイフを使って竹を切ったり、竹筒を積み木のように積み上げることもみらいフェスの会場に出張プレイパークを出現させるという企画が出たとき、いつも公園ではなく、都会の商業施設に囲まれたセンター北の広場で、子どもたちが遊べる西田さんは、はじめて、プレイリーダーと一緒に、まんまるプレイパークで遊ぶ子どもたちに会いました。会場で子どもたちの遊びを見守ってくれていた西田さんは、出産を約二ヶ月後にひかえた妊娠中の女性でした！ 大きなおなかを抱えながら、子どもたちと楽しそうにおしゃべりしながら、子どもたちと楽しそうにおしゃべりしました。

西田さんは、はじめて、プレイリーダーたちはとても悩んだと言います。それでも、「やってみよう！」という結論にたどりつき、それならまんまるで子どもたちにも大人気の竹のタワーをつくってみよう、都筑区といえば竹、竹を使ったワークショップをひらいてみよう、と、次々にアイデアがわき、当日の子どもたちのワクワクする姿を思い描きながら、準備をすすめていったといいます。

西田さんからお話を聞いているあいだにも、ほうぼうから子どもたちが寄ってきて、「西田さん、西田さん」と声をかけていきます。自転車でふらりとあらわれた中学生の男の子も、楽しそうに会話をしています。その表情は、親や友だちと話すときは少し違うような、なんとも言えずリラックスしたものです。西田さんがこのプレイパークで子どもたちにどれほど慕われているのか垣間見えた気がしました。

たり、転がしたりと、ここで遊び方は自由です。まさに、こどもみらいフェスの芝生広場は、突如として現れたプレイパークだったのです。

まんまるプレイパークを訪れて

その竹のタワーは、会場からほど近い公園内で週に3日ほど開催されている「まんまるプレイパーク」のスタッフたちによつてつくれたとのこと。フェス当日も多くのスタッフが会場で子どもたちの遊びを見守ってくれていました。

あの竹のタワーをつくったプレイリーダーたちは、そしてプレイパークで遊ぶ子どもたちに会って、フェスから数ヶ月後の秋晴れのある日、まんまるプレイパークに遊びに行つた 것입니다。

その竹のタワーは、会場からほど近い公園内で週に3日ほど開催されている「まんまるプレイパーク」のスタッフたちによつてつくれたとのこと。フェス当日も多くのスタッフが会場で子どもたちの遊びを見守ってくれていました。

会場で子どもたちの遊びを見守つてくれている竹のタワーとカラフルなティピ。センター北駅前の芝生広場にとつぜん現れたこのタワーとティピが、今回のフェスの象徴でもありました。竹のタワーは、ジャングルジムのようでもあり、おおぜいの子どもたちがくつをぬぎさて、われ先にと登って遊んでいた姿がとても印象的でした。また、広場の向こう正面に立てられたティピーと呼ばれる三角テントは、子どもたちの格好の隠れ家であり、遊び場となっていました。そのほかにも、竹でつくれたシーソーや、竹でハシやかざぐるまをつくったり、そのほかにも、ベーゴマやけん玉、紙芝居など、懐かしい遊びもあって、子どもたちは、とても楽しそうに芝生広場を駆け回っていました。

そんな子どもたちの遊びを提案し、遊具をつくり、あたたかく見守っていたのが、地域のプレイパークのスタッフたちでした。プレイリーダーというのは、子どもたちが自分の責任で自由に遊べる空間のことで、お仕着せの遊具と禁止事項ばかりがある公園とは少し違います。木登りや泥遊び、焚き火や刃物を使った工作などなど、子どもたちがワクワクするような外遊びができます。そして、そこには、子どもといっしょに、自由な遊びと安全を見守るプレイリーダーと呼ばれる存在がいます。

よく見ると、のこぎりやナイフを使って竹を切ったり、竹筒を積み木のように積み上げることもみらいフェスの会場に出張プレイパークを出現させるという企画が出たとき、いつも公園ではなく、都会の商業施設に囲まれたセンター北の広場で、子どもたちが遊べる西田さんは、はじめて、プレイリーダーと一緒に、まんまるプレイパークで遊ぶ子どもたちに会いました。会場で子どもたちの遊びを見守っていた西田さんは、出産を約二ヶ月後にひかえた妊娠中の女性でした！ 大きなおなかを抱えながら、子どもたちと楽しそうにおしゃべりしながら、子どもたちと楽しそうにおしゃべりしました。

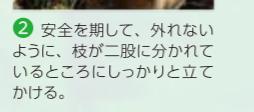


竹のジャングルジムをつくってみよう！

子どもたちは高いところが大好き！
高い公園の木だって登れちゃいます。
竹とロープがあれば、
誰にでも簡単に楽しい
遊び場がつくれます。



①まずは、公園などにある枝振りのいいケヤキの木など、しっかりした枝に竹を立てかけていく。もちろん許可はとって



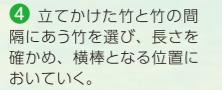
②安全を期して、外れないように、枝が二股に分かれているところにしっかりと立てかける。



用意する竹は長さが3mほどのものから1mほどのものまで、ベースとなる木の高さによって異なるが、だいたい12、3本ぐらいあるといい



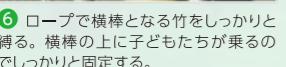
ロープは長さ2m以上、直径が8mmくらいのものを20本以上用意しておきたい。素材は、ナイロンロープが結びやすくほどけにくいが、麻でも綿でもOK。



④立てかけた竹と竹の間隔にあう竹を選び、長さを確かめ、横棒となる位置においていく。



⑤ロープで横棒となる竹をしっかりと縛る。横棒の上に子どもたちが乗るのをしっかりと固定する。



⑥巻き付けたロープの上をさらにハサミ縛りで縛っていく。竹の端がずれてくることもあるので50cmぐらいは出しておく



⑦巻き付けたロープの上をさらにハサミ縛りで縛っていく。竹の端がずれてくることもあるので50cmぐらいは出しておく



⑧もういっぽうの端を持ちながら、縛るので、ひとりだとちょっとつらい。



⑪ものの20分ほどでりっぱな竹のジャングルジムが完成。これならば、木の上のほうにも登ることができる



会場では、のこぎりで竹を切りたり、切った竹を転がしておいたりするだけで、子どもたちの自由な発想が広がり遊びが生まれる。遊びのなかで子どもはさまざまなことを学んでいくのです

「子育てに奮闘中のお母さんこそ、まずは、プレイパークに来て欲しい。プレイパークにいる大人たちは、みんなで子どもを見守っています。少しくらいのケンカがあつたって、そんな誰も気にしません。プレイパークは誰がいつきても大丈夫。私も自分の3人の子どもをプレイパークで育ててきました。どこで子

お母さんと子ども、それぞれのプレイパーク

な風に思っているお母さんたちに、ぜひプレイパークに足を運んで欲しいと思います」

という西田さんのお話を聞きながら、私も

長女が小さいころ、公園でそんな思いをしたことがあったのを思い出しました。公園に行つてもなんだかあまり楽しめない。でも、どこに行つたらよいかわからない。あのころ、

プレイパークという存在を知り、積極的に遊びに行っていたら、もうちょっと楽に子育てができるかも知れないと思ったのでした。

プレイパークには、さまざまな年齢の子が遊びにくる。すぐにたくさん友だちをつくりて元気に遊んでいる子もいるけれど、なかに

はそうではない子もいるそうです。例えば、学校になじめていないような子が、プレイパークにふらりと来ることがある。

最初は口の聞き方も乱暴で、攻撃的な態度で、周りの人も少し心配している。それでも、プレイリーダーが根気よく話しかけたり、まわりの子どもたちとなんとなく遊んでいたりするうちに、だんだんと表情がやわらぎ、笑顔がたくさん見えるようになるということ。この日、まさみっちゃんのそばで、たくさんしゃべって、笑っていた小学生もはじめはそんな子だったといいます。

プレイパークに行ってみよう

この日のまんまるプレイパークでも、就

園、就学前の小さな子どもたちから、学校が

終わってかけつけた小学生や中学生、そして

プレイリーダーやいっしょに遊びに来た大人た

ちまで、木のブランコやターザンロープで遊

んだり、追いかけっこをしたり、焚き火で焼き芋やマシュマロを焼いたり、おなべをついておしゃべりをしたり。公園にはあたたかい日がさ

し、広場はたくさんの人々の笑い声であふれ、

とても幸せな空氣に満ちていました。

最近は、全国でも少しずつプレイパークが

増えてきています。子どもをどこで遊ばせた

らよいのかと悩んでいるお父さんお母さん、

次の週末はプレイパークに足を運んでみませ

ぶ子どもたちの姿は、子ども本来の輝きに満ちています。あの日、フェスの会場でも、そん

な子どもたちの輝きに、きっと心が軽くなっ

たと……自を輝かせて、思い切り自由に外で遊

遊びを見つけて出す本能は本当にすばらしいな

いきます。そんな様子を見るたび、子どもの

遊びを見つけて出す本能は本当にすばらしいな

いきます。

どうんこあそび、焚き火、木登り、木工作

んか。

子どもが何気なくひろいあげた一本の木

の枝は、つえになり、旗になり、釣りざおに

なり、踏み切りのゲートになりと……、豊

かな想像力のもとに、どんどん形を変えて

いきます。そんな様子を見るたび、子どもの

遊びを見つけて出す本能は本当にすばらしいな

いきます。

プレイパークで
結婚式！



プレイリーダーのまさみっちゃんは、なんとココ、まんまるプレイパークで結婚式を挙げた。おじいちゃんから赤ちゃん、そして、いつも遊んでいる多くの子どもたちも祝福に駆けつけてくれた

【プレイパーク情報】

■都筑冒険遊び場…まんまるプレイパーク

開催：毎週月曜・火曜、第1・3・5水曜、第2・4日曜 11:00～17:00
場所：鴨池公園まんまる広場 住所：横浜市都筑区荏田東3-2
電話：070-6481-9663（担当：西田）

<http://manmarupp.ciao.jp>

■横浜のプレイパーク情報は「YPCネット」で検索を

横浜にプレイパークを創ろうネットワーク www.yokohama-playpark.net

■全国のプレイパーク情報は「づくり協会」で検索を

日本冒険遊び場づくり協会 www.ipa-japan.org/asobiba

「ここはタケノコの有名な産地だつたんですね」



つくってみよう、竹のかざぐるま。

フェスの会場で、子どもたちが手に持っていたかわいい風車。ワークショップで黙々と子どもたちにつくりかたを教えてくれた市川さんは、定年退職を機会に竹細工を始めたという。そもそもエンジニアとして、長らく働いていた市川さんは手先が器用で、物づくりが好きだったことから、どこでも身近に手に入る竹は、素材としてピッタリだった。以来10年、独学で竹細工を学び、今では、人に喜んでもらえることが楽しくて、とくに子どもたちに竹細工のおもしろさをプレイパークなどのボランティアをしながら伝えている。



用意する道具：竹割ナタ、ピンチ、ニッパー、ボンド、瞬間接着剤、紙片、竹串、青竹



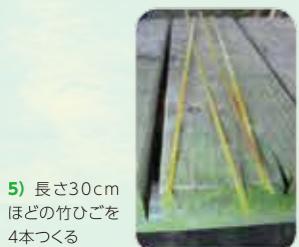
1) 節の間隔が長い真竹、もしくは孟宗竹の青竹を割ったものを用意



2) 竹割ナタ（両刃のもの）でさらに細かく削っていく



3) 縦に細かく削ったら、刃を横にして厚みを薄していく
4) 幅2、3ミリ、厚さ1ミリほどの竹ひごをつくっていく



5) 長さ30cmほどの竹ひごを4本つくる



6) 青い表側を上にして、左右を交互に井桁の形に編む



7) 崩れないようにピンチではさむ。またはセロテープでとめる
8) 端から順番に竹ひごを表側に返しながら、まず4本重ねて輪を4つくる



9) 5本目からは、表側に折り返したら、できた輪の中に端を入れる



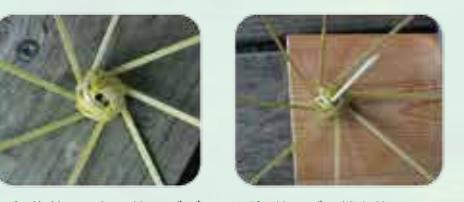
10) ピンチを外し、竹ひごの端を引っ張って徐々に締めていく



11) 徐々に引っ張りながら、輪を小さくしていく
12) 竹カゴ状の小さな玉のようない形にしていく



13) 竹ひごが乾かないうちに、ていねいに形をつくっていく



14) 均等に8本の竹ひごが放射状に伸びているか確認



15) 竹ひごの端を約9cmほどの長さに切りそろえる



16) 2cm四方ほどに切った折り紙や千代紙を用意して



17) 切りそろえた竹ひごの端にボンドで両面張り合わせる
18) 真上から見るとこんな感じで均等に



19) 持ち手となる竹片にキリで穴をあけて竹串を固定する



20) 1cm四方ほどの竹片をつくって穴を開ける



21) 竹串に風車を通し、竹片を固定、余分な竹串を切たら完成



昔はタケノコを収穫するために栽培された太くて長い孟宗竹のタケノコ畑が、今は竹林となって公園などに残っている

こどもみらいフェスの会場で目を引いたのが、竹のジャングルジムや竹をボールに使ったティピやフラッグ。また、竹を素材にしたクラフトワークショップをはじめ、竹筒をホルダーにしたキャンドルナイトなどなど、竹をモチーフにしたコンテンツがたくさんありました。

というのも、都筑区はその昔、タケノコの有名な産地でもあり、昔から竹林が多いところだったので。しかし、ニュータウンの開発とともに、竹林は少なくなり、わずかに

公園などに残っていた竹林も人の手が入らなくなると、荒れてしまいました。しかし、心となり、竹林の整備や管理を行ないながら、竹の利用などとあわせて、地域の環境保全をすすめています。

そこで今回、こどもみらいフェスでも、中川八幡山公園愛護会の協力を得て、地域の竹をイベントで活用させていただきました。そして、イベントで活用したあとは、各ブレ

イパークで今も子どもたちの遊び道具として活躍しています。そんな都筑の竹について、お伺いしてきました。内野さんは長年、中川に暮らし、ニュータウンの変遷を見てきました。また、お子さんが通っていた学校のPTAをきっかけに、中川コミュニティスクール、青少年指導員、そして保護司と、長年、市民ボランティアとして活動、地域の子どもたちの健やかな成長を見守ってきました。

「私がここにきた40年以上前は、まだユータウンが開発される前でしたから竹林はたくさんありました。竹林というよりも、タケノコ畑ですね。女房の父は、竹カゴをつくる

職人で、名前で呼ばれるのではなく、籠屋という屋号で呼ばれていました。この辺はやはり竹の産地だったんですね。しかし、しだいにニュータウンの開発が始まり、タケノコ農家は減っていきました。農家がタケノコ畑を手放し、手を入れなくなると畑は、あつらへんと草むしりや伐採や追肥など、管理をしなければなりません。手を入れれば

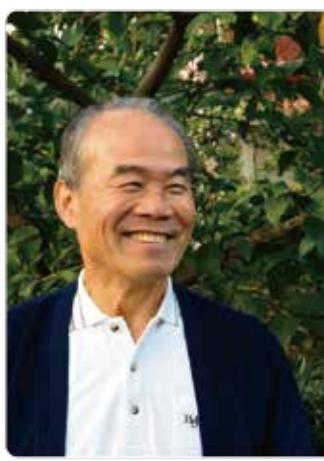
いう間に、うつそうとした竹ヤブになってしまします。公園などに残された竹林もほとんどが孟宗竹ですから、もともとは、そこを手放し、手を入れなくなると畑は、あつらへんと草むしりや伐採や追肥など、管理をしなければなりません。手を入れれば

ちゃんとタケノコも出でてきます

になりました。農家がタケノコ畑となり、そして地域のコミュニティやつながりも少なくなってきたという。

当時は地域のつながりや町内会のつながりなど、コミュニティがとても深くて、そのコミュニティに入らないなんて考えられなかった。すべて地域がベースにあつたんですね。今回イベントに参加してすごいなと思ったのは、地域でもなく、学校でもなく、人同士のつながりが、とても横断的で広いと思ったんです。市民活動を長らくやっていますけど、なかなか他の地域とつながりをもつたりするこ

とは意外と少なく、今やっているコミュニティスクールも地域や学区を越えて、横のつながりをもつと持たなくてはいけないとthoughtしているんです」と内野さん。



竹からつくった「竹紙」も登場！

中越パルプ工業のご協力をいただき、竹を100%利用した世界初の「竹紙」もフェスに初登場。あたたかでナチュラルな風合いの竹紙。竹風車の羽、折り紙、お絵かきノートとして、ワークショップで使わせていただきました。地元産ではありませんが地域の特産であった「筍」を別の角度から知る良い機会にもなりました。かつて日本人にとって生活の一部だった竹は、プラスチック素材などに取って代わり、使われなくなってしまいました。また、竹は中が空洞なので製紙原料としては効率が悪いために、紙としては活用されていませんでした。しかし、竹林を伐採し、資源として活用していくと、国産竹100%の「竹紙」の製品化に成功しました。(中越パルプ工業「竹紙ラボ」より抜粋)





こどもみらいフェスを彩った ステキなアーティストによる未来へのアートワーク

今回のフェスのあちらこちらで、見受けられた印象的なアートワークや装飾の数々。それらは、こどもみらいフェスの趣旨に賛同してくれたプロのアーティストたちによるものでした。そのどれもが、手づくりの温かみを生かした作品で、周囲の人工的で無機質な空間のなか、とてもホットとする気持ちのいい存在感を演出してくれました。そんなアーティストを紹介。



**空間工作人
BUBBさん**

「自然の素材で遊ぶ」こと

多くの人を迎えた流木のオブジェゲート。四方に掲げられた竹とフラッグ。後方にそびえ立つカラフルなインディアンティピ……。フェスの、ひとつのイメージとなったデコレーション・アートを支てくれたのが、アースディヤフジロックなどの空間アートを担当し、自らもARTH Campというフェスをオーガナイズしている、空間工作人のBUBBさんと仲間たち。新潟県で開催された<大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2013>ではアーティストとしても参加した。

コンセプトは、自然の素材で遊ぶこと。子どもの笑顔があふれる場所をつくること。遊びことから子どもたちは学び、それがミライにつながっていく。

そもそも流木や廃材などの「あるもの」を再利用することが、BUBBさんのライフスタイル。コンセプトのひとつには、「捨てないこと」もあるという。

一本一本に個性がある流木。それは時間をかけて、山から海という旅を経て、自然の力によってつくられていく。そして会場のすぐ側の竹林から切り出してきた真新しい地元の竹。

「なるべく人に優しいものを使ってつくったほうが、自分たちも気持ちいいじゃない。子どもが、自分たちも気持ちいいじゃない。子どもたちの遊び場をつくるようになつて特にその考えが大きくなつてきた。自然からもらつたものが一番気持ちいい。流木や竹は山から来たものだし、最後には、薪にしてご飯も炊ける。命あるモノだから、その命をいただいているわけだから、次に生かすように最後まで使うことが、木々に対する愛情かなうて思つているんです」とBUBBさんは言つ。

「子どもが笑っている場所って、落ち着くじゃないですか。子どもの声が聞こえてくるだけでも安心するしね。子どもたちがゆっくりできる場所、楽しむ場所って、親もゆっくりできるわけだし。そういう場所は、親同士のコミュニケーションも生まれる。子どもを通したつながりって大切だと思うんです。特に3・11を過ぎて、その想いが強くなつた。子どもたちに何かを感じてもらう。そして遊ぶことから何かを想像してもらう。それが未来につながります」とBUBBさんは言つ。

「親御さんは失礼な言い方になつてしまふるさとのイメージにある「そこで遊ぶ」ということ

そして、BUBBさんは自らの幼少期の記憶から、「自然のなかでの遊びから、子どもたちはルールやモラルを教わる」と言う。

がることだと思う」

「親御さんは失礼な言い方になつてしまふるさとのイメージにある「そこで遊ぶ」ということ

そして、BUBBさんは自らの幼少期の記憶から、「自然のなかでの遊びから、子どもたちはルールやモラルを教わる」と言う。

Keisukeさん

**藤吉光恵さん
カメラマン**

葉っぱの庭師として日本庭園や洋風庭園のガーデニングやランドスケープデザインなどを手がけ、流木アーティストとして、流木と植物をからめた流木装飾など、さまざまな場所やイベントで活躍。今回は会場のゲートともいえる、流木と葉っぱのオブジェを作成。

【藤吉さんからのメッセージ】

写真を撮るのは本当に楽しい♡
カメラを持たせてもらえる機会は色々あるけれど
やっぱりこうしてこどもたちと
そのこどもたちを見守るおとなたちとの素敵な時間を
残すお手伝いができるのはとても幸せだなと思うのです。
こどもたちにとってこの街がかけがえのないふるさとになっていきますよう。
私の周りにいる素敵なおとなたちと一緒に
小さな一步を続けていけたらな。
世の中なんだかいろいろあるけれど、この子どもたちの笑顔を見ていたら。
未来がほんとに明るいものでありますよう。願わざにはいられません。
大好きな、想いあふれる幼稚園とその仲間たち。
こんな大きな素敵なフェスが地元で出来ちゃって
本当にびっくり&楽しかった♡
町の子育てにもいろいろあるけれど。
やっぱりこういうあたたかい場所は残ってほしいなあ。

1973年横浜生まれの横浜育ち。2児の母。「あたりまえの日常こそ宝物」そんな気持ちを大切に。ママフォトグラファーとして現在は妊娠出産からファミリー撮影までを手がけている。写真のチカラを借りて子育て中のパパママたちを応援するべく、かぞくのものがたりを撮影中。

今回のフライヤーにはじまり、本書の表紙に描かれているカラフルな切り絵のようなイラストを書いてくれた池田仁美（H+D）さん。そもそもは、音楽ライブのフライヤーやパンフレットなどをデザインするグラフィックデザイナー。現在は、自分自身も3才男児の子育てに奮闘中。

**池田仁美（H+D）さん
デザイナー・イラストレーター**

